MUSEUM OF ETHNOLOGY ART CHUBU UNIVERSITY

News Letter 中部大学民族資料博物館

vol.09
October 2015

民族資料博物館のアドヴァイザーを務めていただいている学園長より、構内の参考作品をめぐって交流を育まれてきた思い出をおうかがいするシリーズです。第５回の今回は「逆さの人物」についてお話をいただきます。

『学園探訪』シリーズ

第５回

逆さの人物

ミロが生まれたスペインのカタルーニャ地方は、彼の他に多くの有名な芸術家を輩出しています。画家のピカソ、現代ではチェロ奏者のパブロ・カザルス。スペインのなかでも民族的に闘争の歴史を持つ地域で、常に自己存在の意味を突きつけられる生い立ちから、多くの表現者たちと同様に、ミロも作品に「新しい自由とは何か」をテーマに生涯を通じて追求していったといわれています。この大きなテーマが作品のどのようなところから感じとることができるか、私なりに考えてみたいと思います。

それは、作品を見る人と描き手の側との、２つの考え方があると想像されるのです。

参考作品：《逆さの人物》
リトグラフ　41.0×62.0cm
作者：ジョアン・ミロ
（中部大学蔵 展示場所・中部大学キャンパスプラザ）

ジョアン・ミロ（1893～1983年）20世紀スペインの画家。カタルーニャ地方、バルセロナ出身。画家のピカソやアメリカの作家ヘミングウェイらとも交流があった。シュルレアリスム運動にも参加し、大地や自由を象徴するために、女性や鳥をモチーフとした作品を多く描いた。戦後は絵画だけでなく、彫刻や陶器、パブリック・アートなどの大作も制作。

索引（いんさく）

◇巻頭
『学園探訪』シリーズ　第５回《逆さの人物》
学校法人 中部大学 学園長　大西良三 ―1

2015春季・夏季行事報告

◇素材研究資料展示
４月『日本絵画の材料』
民族資料博物館　原田千夏子 ―2

◇特別講座
４月『古典絵画講座』（通年）はじまる
民族資料博物館 外部専門委員　下川辰彦 ―3

◇春季展示会
５月『自然布―悠久の技に学ぶ』
民族資料博物館 副館長　宇治谷　恵 ―4

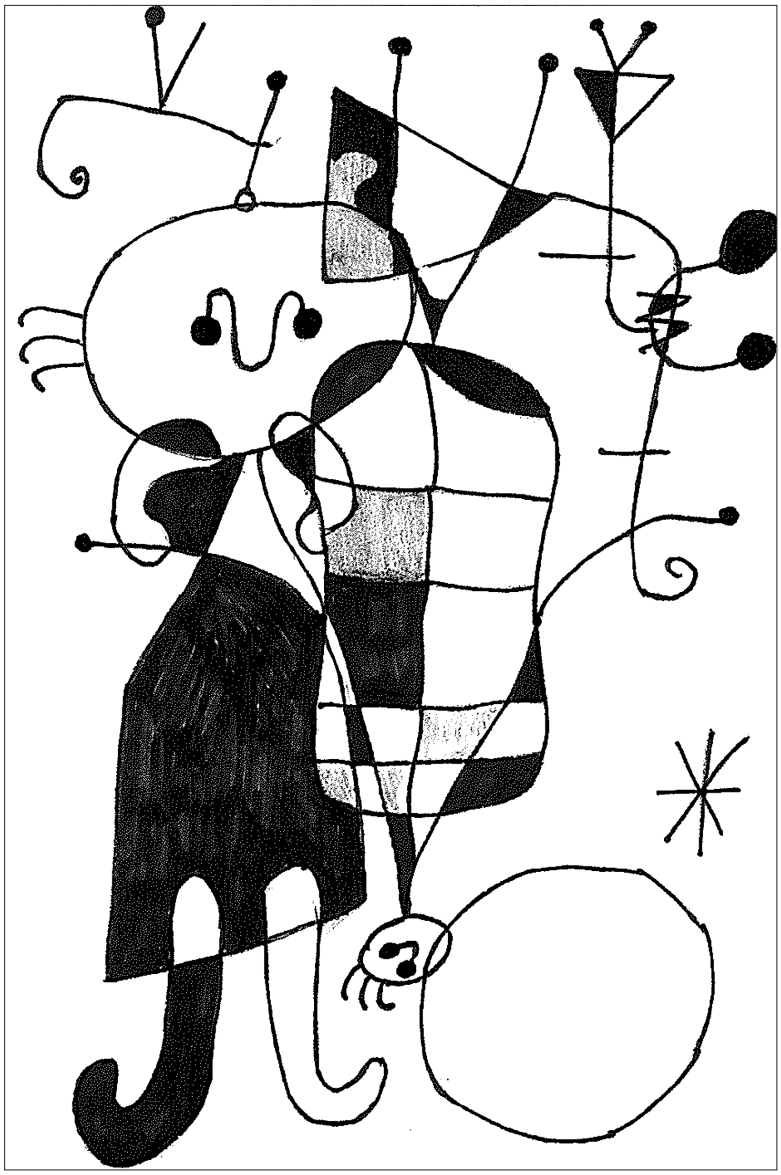
◇春季連続講演
『自然布―悠久の技に学ぶ』
６月　第一回「藤織りと裂き織り」
７月　第二回「エジプトの亜麻
―メトロポリタン美術館の所蔵品などから」
民族資料博物館 副館長　宇治谷　恵 ―5

◇夏季常設コレクション展示
７月『美の起源―五大陸の絵具』
民族資料博物館　原田千夏子 ―6

◇協力催事
７月　８月　夏のオープンキャンパス
『国際関係学部の分会場としての利用』
国際関係学部 教授　杓谷茂樹 ―7

◇トピック
博物館資料の学生利用について
―ボランティア・NPO センターの国際理解研修にむけて
民族資料博物館　原田千夏子 ―8

2015 下半期（秋季冬季）行事案内



参考作品： ジョアン・ミロ 《逆さの人物》 描き起こし図（上下反対にした場合）

この作品の題目から察しますと、描かれた人物は足を上に投げ出して浮かんでいるように見えます。赤い円はさしずめ太陽といえましょう。しかし、私にとってはあまり落ち着かない雰囲気なので、あえて画面を「逆さま」にして眺めてみました。一番目を引くのは、人物の黒い二つの目です。鼻と眉を一本の線でつないだような、どこかあどけない表情。周囲にはこの黒い線があちこちの方向に向かって伸び、まるでアンテナを張っているかのようです。アンテナの先端には、あの「黒い目」が。この場所から遠く離れた時空の世界をみつめてみたいという人間の願望を表しているようにも見えてきます。この人の足は、傘の柄のように丸く、重力を感じさせない軽やかさが表されています。やはり宙に浮いているようにも感じます。すると今度は、隣の赤い円は、何だといえるでしょう。この人の「影」か、はたまた「(燃える) 心」を投影するものかもしれない、などと思えて楽しく想像を膨らませます。これはまるで、ミロ自身が、一つの事象や物事に対面するとき、別の視点が他にもあるという楽しさを知らせてくれているように感じられるのです。日々、多くの情報にあふれた私たちの生活のなかにおいても、このミロの「ささやき」のように新鮮な気持ちで向き合う柔軟な心を持つように心がけ、思考できるようになりたいものです。

この作品のなかで、大地と空の関係性を超越していくところに新たな観点を見出してみたいという描き手の意識を私は感じ、その先入観に捉われない生き方に惹かれるのです。また、土地のしがらみを自由に飛び越えていく勇気は、時代も国も越えて、多くの人々の夢といえ、それをかたちにして見せることが彼の魅力といえるのかもしれません。

皆さんの学びの日々にも、未来を想像する楽しさを感じる瞬間に出会われることを願っています。

2015春季夏季行事報告

4月 | 5月

素材研究資料展示

素材研究資料展示「日本絵画の材料」

‖ 期間 ‖ 2015年4月8日（水）～2015年5月12日（火）
‖ 会場 ‖ 中部大学民族資料博物館　多目的室
‖ 企画 ‖ 原田千夏子（民族資料博物館）

指導協力：下川 辰彦（日本美術院特待・民族資料博物館 外部専門委員）

春の入学シーズン到来の時期に、社会連携推進部のアテンドで春日井市の姉妹都市のカナダ、ケローナ市の皆さんが当館を見学される機会に合わせて、日本の伝統的な天然材料を紹介する展示を企画した。実際に画家が用いる顔料や染料の現物を借用して、絵皿に少量出して、手に触れることができる

展示チラシ

コーナーを設置する他、展示のメーンは、一昨年の秋季企画展示「素材研究展示 古典と現代の比較　顔料と染料における日本画の新たな表現」で新規に制作した顔料と染料を比較して検証できる実験パネル（日本の顔料と染料を成分内容に応じて表現の仕上げを表すパネル）で、そのパネルの制作主旨の英語と日本語の二ヶ国語の解説パネルをこのたびの資料展示において新たに作成した。

その他、墨や和紙、金箔についての材料面の解説、およびこれらを用いて発展してきた日本の色彩が、平安時代の国風文化のもとで「重ねの色目」や「料紙」芸術が発達した背景をコンパクトに解説する日英表記パネルを制作して設置した。

見学の翌日は、県内の小原村へ和紙の体験を予定していると聞き、関連した内容として目にしてもらった点はよかった。常設展示における「シルクロード室」に常設中の日本画作品と壁画模写作品に参考となる付属の解説として、天然材料に美的価値を見出して発達してきた古典絵画の研究と、現代の日本文化の中で根差す美的感性の一端を少しでも感じ取ってもらいたいという目的で実施した。

実施決定から短期間での準備対応となったため、改善する内容表現など課題も複数あることがわかったので、次回にむけて工夫していく。（原田）

展示風景

4月

■ 特別講座

「古典絵画講座」通年はじまる

‖ 期間 ‖ 2015年4月15日～2016年1月27日（予定）通年
水曜日・午後／全26回　一般有料（定員制）
‖ 教室 ‖ 10号館6階　106Ｊゼミ室

指導講師：下川 辰彦（日本美術院特待・民族資料博物館 外部専門委員）

開講5年目を迎える特別講座（古典絵画）は、絹絵、板絵、日本画の自由選択制になり、さらに今年度からは通年制に切り替えることとした。

年数を重ねるごとに、受講生の意識は高まり、一枚の作品にじっくり向き合い学習したい者と、小品を組み合わせて制作していきたい者などが増え、半年間の13～15回程度では制作の時間数が足りないという声が多くなったことを受けて、通年制への切り替えを博物館へ相談した結果、実施が実現できることとなった。

昨今では、東海周辺では、バブル崩壊後の不景気のなかで文化教室の人数が激減し、閉鎖を余儀なくされる教室も少なくないと聞くが、本講座では毎年抽選により受講生を制限させていただくという点ではありがたく思っている。私に出来ることは、その分、他の教室では紹介されることが少ないと思われる技法や材料の話をさせていただいている。日本絵画の魅力を実際の作品を制作するなかで、深く感じ取る機会にしてもらえればそれで嬉しく、またそれを各自が、次の機会に、生活風景のなかで家族や友人知人に広めてもらえれば、このうえなく幸いである。（下川）

※ 博物館担当者より――受講生の小笠原 孝さんが、平成27年度の第64回 春日井市民美術展覧展に出品された作品「ひまわり」が財団理事長賞を受賞されました。日々の講師の指導も糧となり、実力をつけられていった成果として一堂嬉しく、この場をお借りしてお祝い申し上げます。（原田）

講座風景

5月

■ 春季展示会

「自然布―悠久の技に学ぶ」

‖ 期間 ‖ 2015年5月21日（木）～ 7月7日（火）
‖ 会場 ‖ 民族資料博物館 多目的室
‖ 企画 ‖ 悠々会（愛知県春日井市　染織の制作等の活動を行っている市民グループ）

展示風景

中部大学民族資料博物館は、開館以来、学内の教職員や学生だけでなく広く市民の方々から多大なご協力をいただいてきた。今回の企画展は、その間の協力や連携の成果を展示として紹介したものであった。

自然布は、自然に生えている植物や生息する生物の繊維を、その土地の泥や植物の色素で染めて織られたものである。また、自然布は地域の人々により、親から子、子から孫へと代々受け継がれてきた知恵と技術により生み出されてきた。この自然布を通じて、人々の願いやその底に潜む心、そして生業など悠久の生活や技術を、現代の若い人々がその心を考え学ぶよい機会になったのではないかと思った。主な展示物は「藤織り」や「裂き織り」のほか、今回の展示の協力者である悠々会の方々が収集や製作した「あんぎん」など選りすぐられた資料であった。それら資料を歴史的、民族（民俗）的、あるいは技術史な切り口で紹介することで、資料に新たな価値を付加することができた。また、これまで博物館ではあまり紹介されなかった資料と出会うことができ、今まで気づかなかった博物館資料の奥の深さを再発見することができ、今後の民族資料博物館における資料展示のあり方を再考察する上でもよい機会となったのである。　（宇治谷）

6月
―
7月

■ 春季連続講演

「自然布―悠久の技に学ぶ」

第一回「藤織りと裂き織り」

講師：井之本　泰 氏　（丹後藤織り保存会 会長）

第二回「エジプトの亜麻：メトロポリタン美術館の所蔵品などから」

講師：梶谷宣子 氏　（メトロポリタン美術館名誉館員）

総参加者数：109名

春季連続講演チラシ

■ 連続講演１｜2015年6月7日(日) 13：30～｜中部大学リサーチセンター 大会議室

第一回「藤織りと裂き織り」

講師：井之本　泰 氏（丹後藤織り保存会 会長）

丹後藤織り保存会会長の井之本泰氏から春季企画展「自然布―悠久の技に学ぶ」の関連事業として「藤織りと裂き織り」というテーマで講演を受けた。

井之本氏は、現在、京都・丹後にある藤織り保存会の会長であるが、長年、京都丹後郷土資料館にて丹後地域の民俗文化資料の収集・保存・研究活動などをおこなわれていた。特に、藤織りをはじめとする染織の研究においては全国的に著名な研究者であるだけでなく、自らが、藤織りの保存活動の先頭になり、お住まいも丹後半島の上世谷に居を移し、そこで地元の方々と生活をとも

にしつつ藤織りの保存活動を実践されていることを明記しなくてはならない。

講演内容は、木綿以前の染織のこと、丹後における藤織りの歴史や実態、そして藤織りや裂き織りをはじめとする染織品の全国的な所在情報のことなど多様な話題が提供された。また、藤織り製作にかかわる「合力」（ごうりき）と呼ばれる、ある種の「結」（ゆい）の組織の話とともに、丹後地域の古老などの生の体験や伝承の紹介などこの地域の文化や技術の継承をいかに生活と共存させるかなど、われわれが日常ではあまり知りえない貴重な話であった。この指摘は、今後の地域文化を継承するうえでの博物館の役割だけでなく、今、政治や行政においての地域創生をいかにおこなうかなどを考えるうえでも貴重なお話であった。講演終了後には、参加者からも熱意ある質問や意見があり、今後の研究を継承・発展させるうえでも有意義な講演会となった。（宇治谷）

講演の様子

■ 連続講演２｜2015年７月７日（火）15：30～｜中部大学リサーチセンター 大会議室

第二回「エジプトの亜麻：メトロポリタン美術館の所蔵品などから」

講師：梶谷宣子 氏（メトロポリタン美術館 名誉館員）

メトロポリタン美術館は、世界の三大美術館（博物館）と言われ、フランスのルーブル美術館、イギリスの大英博物館に並び称せられる、アメリカで最大の美術館である。梶谷先生は、長年、美術館の染織資料の責任者としてお仕事をされており、染織に関する研究や保存では世界的に著名な先生である。私事であるが、今から20年ほど前、先生から染織資料の展示について指導を受けたこと、特に個々の資料の特質をよく観察することの重要性を教えられたことをは今でも忘れることができない。

講演内容は、多くのメトロポリタン美術館所蔵品のなかでも「エジプトの亜麻」の状況とその歴史的な価値、あるいは技法や材料、そして染料と染色の助剤について、具体的に資料をもとに詳細な紹介があった。その後、エジプトにおけるナイル川の役割や西アジアのコーカサス地方までの伝播についても言及された。最後に、技術や材料の交流や伝播が人々の歴史や文化交流と深く結びついているとの視点は、現在の日本においても、地域文化を研究する意味でも、あるいは博物館の果たす役割についても改めて認識させられた。しかし、メトロポリタン美術館でさえ、現在、資料調査に携わる人材が減少していると指摘されたことは、これからの民族資料博物館において資料調査をどのように充実させるかを考えるうえで貴重なお話であった。講演終了後には、参加者からも熱意ある質問や意見があり、今後の研究を継承・発展させるうえでも有意義な講演会となった。（宇治谷）

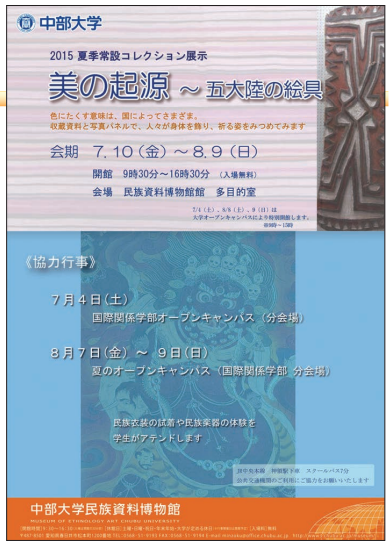
講演の様子

7月
|
8月

■ 夏季常設コレクション展示

「美の起源　～五大陸の絵具」

‖ 期間 ‖ 2015年7月10日（金）～ 8月9日（日）
‖ 会場 ‖ 民族資料博物館 多目的室
‖ 企画 ‖ 原田千夏子（民族資料博物館）



夏季常設コレクション展示チラシ

毎年、夏のオープンキャンパス開催時期にあわせて企画している常設資料にテーマを設定しクローズアップして紹介する展示で、今年は、世界の民族において、色彩の用いられる風景を切り取り、その色の意味と、色に託される儀礼や生活の様子を写真パネル等にして解説を付けて紹介した。

人類と「美」に関する起源は、「身体を飾りたい」という本能的な行為から始まっていると考えられている。例えば、旧石器時代の墓からは、花の化石が発見された事例がある。つまり、死者に花を手向けるという弔意を感情のなかで感じていた事実が証明されたことを意味する。

またスペインのアルタミラやフランスのラスコーなどの洞窟壁画には、白色で下地を塗り、その上に朱色や黒色で獣や人物が描かれ、儀式の空間との関連性が考えられている。

その他、アフリカ、オセアニア、アメリカの先住民の民族的儀式にのこる身体装飾には、ボディペインティングをすることで、若者が成人へと変化する際の通過儀礼のために悪霊から守護する意味が例えば赤色に託され、死者や先祖との交信をする意味には白色が託される、といった事例が複数ある。

これらの素材は、土や樹木の実であり、まさに天然の材料である。大地の恵みを身体に塗り重ねて、生命力を増長させるという考え方のもとで伝承されている。

各国の絵具の現物は、当館には少ないため、展示資料に施されている絵具をヒントに想像するため、関連資料を展示に採用した。

また、用いられている画像映像を紹介するパネルが少ないことから、文献から参考写真を複写し拡大印刷することで視覚材料を追加した。

これらと比較する意味で、素材としては同じ土や岩、染料を用いながらも、日本の絵画の場合はどうか、という点で、一昨年の企画展示で制作した顔料の成分の相違による表現の仕上がりを比較するパネルを本展示においても一部展示した。

一昨年の展示の企画内容を、いずれ世界の国々のこうした色彩の事例と比較して検証してみたいという意識が当初からあったため、その第一回目の機会として実現できたことは一つの成果として嬉しい。

各国の民族儀式と、絵画材料として発達してきた日本の場合とを比較し、人類の移動とともにそれぞれの地域で発展した美意識の過程を一望できる提案として、今後の解説作成の資料として応用していきたい。　（原田）

展示風景

8月

■ 協力行事

オープンキャンパス

■ 国際関係学部オープンキャンパス分会場

‖ 期間 ‖ 2015年7月4日（土）、8月7日（金）～9日（日）
‖ 会場 ‖ 民族資料博物館『民族衣装と楽器』特設コーナー

「博物館で新・国際学科の多様な学びに触れる」

杓谷茂樹（国際文化学科 教授）

「このあと、民族資料博物館というところで民族衣装を着てみたり、民族楽器を鳴らしたりしてみませんか？」。夏休みにいくつもの大学のオープンキャンパスをまわって、自分の進路を定めようとしている高校生も、おそらくそんな誘いを受けたのは、ここが初めてだったのではないだろうか。

8月7日（金）、8日（土）、9日（日）の3日間にわたり開催された夏のオープンキャンパス。民族資料博物館を会場とした民族衣装試着と民族楽器の体験企画は、国際関係学部の恒例行事となっている。

20号館1階の学生ラウンジで国際関係学部の教員やアシスタント学生と話をしたり、模擬講義などのイベントに参加したりした高校生たちが、学生に連れられて民族資料博物館にやって来る。

入口を入ってくるときの彼らの足取りは恐る恐る。顔つきは「へー、こんな場所があるのか…」と驚いたような、感心したような。そこで、担当教員やアシスタント学生が彼らを迎え入れるのである。

高校生は、ここで教員や学生から展示の解説を受けることができるし、民族衣装を試着したり、民族楽器の音を出したりすることもできる。

見ていると、真っ先に民族衣装を着ようとするタイプと、まずは展示に向かおうとするタイプがあって面白い。前者は友だちと一緒に写真を撮りながらとてもうれしそうにニヤニヤしている一方で、後者は解説を聞きながら展示をじっくり見ているが、体験できる民族衣装や民族楽器から少し距離を置き、なかなか触ろうとしない。

どちらも博物館の見方として

は決して間違ったことではない。でも次に来たときには、前者にはじっくり展示を見てほしいし、後者にはどんどんモノに触ってみてほしい。民族資料博物館は、何度来てもそのつど新しいつきあい方ができる場所なのだから。

来年、国際関係学部は従来の3学科をひとつにまとめて、国際学科という1学科からなる新体制がはじまる。

博物館の展示品は、単に多様な文化が生み出してきたモノが並んでいるというだけではなく、それぞれに歴史や社会、そして時には政治や経済などにいたる様々な背景があることを垣間見せてくれる。だから、国際関係学部の会場に来た高校生が持っているようないろいろな関心に合わせて、民族資料博物館も様々な見方、学び方を提示していけるようにしていきたいものだ。

最後に、博物館職員の皆さまには温かいご協力をいただき、厚く御礼申し上げたい。

（杓谷）

オープンキャンパスで民族衣装や民族楽器を体験する高校生たち

博物館資料の学生利用について

—— ボランティア・NPOセンターの国際理解研修にむけて

ボランティア・NPOセンターの学生の活動で、外部施設での国際理解研修に参加する学生らが、研修前の事前学習のため、当館の民族衣装を用いて、各国の文化的背景を学習しました。

「百聞は一見に如かず」と言いますと大げさですが、その国を知りたいと思うときには、現地のものに「触れる」ことが一番でしょう。言語、食事、衣服、道具…。衣食住は人間の基本であり、またその土地の気候風土を土台にして発達してきたものばかりなので、その土地で継承されてきた民族衣装には、厳しい自然気候に立ち向かうための先人の知恵がいくつも込められていることが、手に取ることで言語ではなく五感という知覚の体験によって感じとることができます。その土地に生きる人々の姿を想像し思いを馳せるとき、すでにそのときから文化交流がスタートしています。いつか、海外を旅したときに、その手の感触を思い出して現地の人々とのふれあいに役立つことがありましたら嬉しいです。　（原田）

ボランティア・NPOセンター所属の学生たちが博物館資料を手にして、グループ学習する様子

2015　下半期（秋季冬季）行事案内

MUSEUM OF ETHNOLOGY ART CHUBU UNIVERSITY

◇秋季展覧会

植物≒女性　イメージは世界をかける

会期：平成 27 年 10 月 13 日（火）～ 11 月 6 日（金）
場所：民族資料博物館　多目的室
主催：中部大学民族資料博物館・京都工芸繊維大学美術工芸資料館
企画：京都工芸繊維大学アートマネージャー養成講座 2014 年度受講生 Step Ⅲ

◇写真展

「世界に羽ばたいた中部大生 青年海外協力隊50周年記念写真展」

会期：平成 27 年 11 月 30 日（月）～ 12 月 22 日（火）
場所：民族資料博物館　多目的室
主催：独立行政法人 国際理解機構中部センター・中部大学国際関係学部・
　　中部大学民族資料博物館

◇作品制作発表展

「特別講座受講生作品発表展」（平成 26 年・27 年合同）

会期：平成 28 年 3 月 23 日（水）～ 4 月 7 日（木）予定
場所：中部大学民族資料博物館